

Ⅱ 小 学 校 編 Ⅱ

多様な考えを生かした算数指導
～課題設定の工夫と協働的な活動の充実を通して～松戸市立高木小学校教諭 いしい 石井 なおみつ 直光

1 研究主題について

平成 25 年 6 月に第 2 期教育振興基本計画が閣議決定された。その前文で、「今正に我が国に求められているもの、それは、『自立・協働・創造に向けた一人一人の主体的な学び』である。」そして、今後の社会の方向性として自立、協働、創造の 3 つの理念の実現に向けた生涯学習社会を構築するために、多様性を尊重していかなければならないとしている。

これを受け本県でも、平成 27 年 2 月に新みんなで取り組む「教育立県ちば」プランが策定された。その施策 7 では、教育現場の重視と教員の質・教育力の向上で「課題探求型の学習、主体的・協働的な学習などの新たな学びを展開するための実践的指導力、高度な専門的知識など、指導力の向上に取り組むことが必要」と掲げられている。

新小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月公示）の算数科の目標の（3）は、「数学的活動の楽しさや数学のよさに気付き、学習を振り返ってよりよく問題解決する態度、算数で学んだことを生活や学習に活用する態度を養う。」である。この中の「学習を振り返ってよりよく問題解決する」では、問題解決後の過程の振り返りを取り入れた授業を展開することが求められている。このことから、協働的な活動を通して多様な考えに触れ、自分や他の考えを振り返ってよりよく問題解決することが重要であるといえる。

前任校の全国学力・学習状況調査の結果

から考察すると、算数科はどの分野も正答率が低く、特に算数 B（主として活用に関する問題）の「B 量と測定」と「C 図形」が特に苦手である。その中でも、解決の見通しと既習の活用に課題があると見て取れた。

算数教育研究では、従来から多様な考えを生かした指導について考察がなされてきた。そこで私は、多様な考えを生かした指導に、今求められている協働の視点を取り入れ、新しい活用型の授業実践を試みたいと考えた。自力解決の場面で取り掛かるまでに時間を要する児童、一つの解法で終わってしまう児童にも既習の知識を生かして、課題に向き合い、多様な考えを持たせたい。その考えを協働的な活動を通して、互いの良さを認め合い、よりよい解を生み出すような指導を行いたいと思い本主題を設定した。

2 研究目標

既習と実態に応じた課題を提示すれば、児童が多様な考えを持てるようになるか明らかにする。また協働的な活動を設定すれば、児童が自分の考えの良さや違う考えを認め、活用できるようになるかについて明らかにする。

3 研究の実際

(1) 研究仮説

- ① 児童の既習と実態に応じた課題の設定をすれば、多様な考えが持てるだろう。
- ② 比較検討の場面で協働的な活動を充実さ

せれば、多様な考えに触れ、自分の考えを振り返り、互いの考えの良さを認め、活用することができるだろう。

(2)授業の実際

①第5時 －L字型の図形の求積－

導入時に面積の求積公式を確認した。課題設定の工夫として、L字型の図形の求積について、多様に考えることができる形にした。既習の想起と本時の見通しを持たせる目的で、L字型の図形(図1)を封筒で部分的に提示し、形と面積を想像させた。

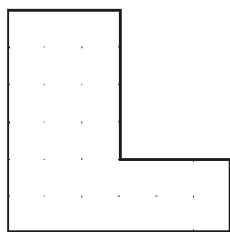


図1 L字型の図形

解決の見通しを共有した後、ワークシートと、同サイズの紙2枚を配布し、自力解決させた。児童が考えたワークシートを黒板に貼り出し、同じ考えを拡大掲示した。

児童は同じ考えを探し、黒板に貼ると新しいワークシートを持っていき、自力解決を繰り返した。黒板に貼っている考えを参考に、自力解決する姿もあった。

本時は8つの多様な考えを取り上げ、考えと式を発表させた。協働的な活動で、自分の考えと比べ、不明な点は質問するよう指導し、他の考えの読み取りをさせた。また、児童に多様な考え一つ一つの方式名(切り分け、移動、2倍など)を付けさせ、それぞれの考えの良さを確認した後、比較検討に取り組ませた。多様な考えのまとめ方は構造化とし、「仲間分けをしていきたい。」の発問から児童らは8つの考えを方式名から3つに構造化(切り分け、移動、プラス)した。最

後に、振り返りの視点を自分や友達の考えについて書くことと指示し、発表と共有を行った。

②第6時 －J字型の図形の自己選択とJ字型の図形の求積－

課題設定の工夫は、前時に出た8つの考えの構造化を振り返ることと、その考えが活用できる問題の提示である。協働的な活動の設定は、適用問題提示前に自己選択し、実際に試す場面である。始めに前時に出た8つの考えの構造化を振り返った。共通する形に着目させ、「すべて四角形(正方形、長方形)になっている。」と共通点を見出させた。次に8つの考えの中から自己選択として、良いと思うものを選び、実際に試す場面を設けた。ワークシートに真似して解決方法を確認する活動をさせ、選択理由も書かせ、共有した。

J字型の図形(図2)の提示後、前時の8つの考えを参考にさせるため、児童らの発言から作った学習問題は、「Jがたの面積を切り分けなどを使って求めよう」とした。その後解決の見通しを共有し、自力解決を行った。

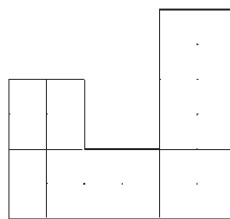


図2 J字型の図形

児童が考えたワークシートを黒板に貼り、互いに相談し、同じ考えは児童らでグループ化していた。前時のどの考えを使って適用問題を解いたのかを確認した。一例を挙げ、図に描いた線からどのような式になるかを周囲で話し合わせ、式の意味についても考えさせた。最後に振り返りを書かせ、共有した。

(3) 児童の思考の変容について

- ①第5時と第6時の解答数の変化について比較した。調査対象人数32人に対し、複数解答者は、第5時L字型の解決で18人、第6時のJ字型の解決では22人となった。L字型の解答で解答数0が3人いたが、そのうち2人は、L字型の解決で発表された8つの考えの中から解答し、J字型の解答では全員が解答できた。
- ②児童の活動を(ア)第5時L字型の自力解決、(イ)振り返り、(ウ)L字型の自己選択、(エ)第6時J字型の自力解決、(オ)振り返りの内容に分けた。その中から(ア)(ウ)(エ)の解決方法で変容を見取り、A群からE群に分け、類型化を行った(表1)。

表1 解決方法の類型化

A群(5人)	J字型の解決に活用した考えが、自己選択で解答した考え、且つ、L字型の解決で自分が解答しなかった考えであった。
B群(20人)	J字型の解決に活用した考えが、自己選択で解答しなかった考え、且つ、L字型の解決で自分が解答しなかった考えであった。
C群(2人)	J字型の解決に活用した考えが、自己選択で解答しなかった考え、且つ、L字型の解決では解答数0であった。
D群(4人)	J字型の解決に活用した考えが、自己選択で解答した考え、且つ、L字型の解決で自分が解答した考えであった。
E群(7人)	A～Dに該当しない。

※児童によって重複あり、欠席2名は対象外

類型化した理由は、群ごとに次の2つの効果を検証するためである。

α : L字型解決時の多様な考えの比較検討による構造化が、J字型の解決に効果があったか。

β : L字型の多様な考えから自己選択したことが、J字型の解決に効果があったか。

A群は、 α β の両方が効いていると思われる。L字型で自分が解答しなかった考えに触れ、自己選択で実際に試し、その良さを感得した。そしてJ字型の解決に活用し

たとえられる。

B群は、 α の効果があったと思われる。自己選択では選ばなかったが、L字型で自分が解答しなかった考えをJ字型の解決で活用した。C群はB群の部分集合であり、同様の効果といえる。

D群は、 β の効果があったと思われる。自己選択の場面で、L字型で自分が解答した考えを振り返り、再度試して確認した。それをJ字型の解決に活用したと考えられる。

4 研究のまとめ(成果・課題)

(1) 成果

①児童の既習と実態に応じた課題設定の工夫と、自己選択の場面を設定した。児童は課題解決時と適用問題解決時に既習の考えを活用しようとする姿が見られた。

②協働的な活動の視点を明示し、多様な考えを比較検討により構造化させた。児童は自分が解答しなかった多様な考えに触れ、自分の考えを振り返り、他の考えの良さを認めることができた。

(2) 課題

①第5時L字型の解決と第6時J字型の解決の関係性や比較を十分にしておけば、さらに既習の活用やより良い考えを生み出すことにつながったと考えられる。

②自己選択の振り返りとして、選択理由を丁寧に整理、共有する場面を設定しておけば、より深く自分の考えや他の考えを理解することができたと考えられる。

【参考文献】

古藤怜・新潟算数教育研究会(1998).『コミュニケーションで創る 新しい算数学習 多様な考えの生かし方まとめ方』.東洋館出版社

中学校編

実社会で活用する古典の学習指導

～「兼好法師家集アンソロジー」「徒然草」人生相談」を編集する活動を通して～

船橋市立湊中学校教諭 よしずみ ひでみ 吉住 任美



1 研究主題について

伝統的な言語文化の指導が重視されてきたにもかかわらず、平成25年度全国学力・学習状況調査で「古典は好きか」の質問に肯定的な回答をした生徒は29.3%という報告がされた。生徒たちは古典を難しいと感じ、興味や関心をもてず、その有用性を実感できていないことが原因だと考える。この現状を打開するためには、知識習得だけではなく活用する場を設け、古典の有用性を実感させる学習を組織する必要がある。

本研究では、吉田兼好の和歌集『兼好法師家集』と随筆『徒然草』を学習材とし、編集学習を通して言語運用させ、読解力の育成と有用性を実感させ、伝統文化の継承に参加させることを目指す。その具体的な手立てを以下に述べる。

第一は、アンソロジーづくりや人生相談を編集する言語活動を行い古典を活用させる場を設定する。そうすれば、自分事として主体的な学びが発動され、活用する方法を学びながら言葉によって表現される伝統文化などの芸術性に気付かせることや、古典が役立つものだ実感させることができるはずである。

第二は、編集プロセスを構築することである。この研究において編集学習とは、テキストの中から必要な情報を取り出し、自分の目的や意図に合わせて組み立てる学習方法である。その過程で、読むことと書くことが往還的に行われ、思考・情報・言語操作が促され、自分の考えを形成する能力を育成できるはずである。このプロセスの中で、生徒自身が古典の価値を発見し、発

信することができるように、個々の学力に応じた支援をすることが一人一人の読む力を育み、個々の学びが保証できると考えた。

第1單元では、『兼好法師家集』の和歌を分類・比較し自分の文脈や価値観と結び付けながら3首選択する力をつけることを目指す。さらに、それを順番や配置を考え、伝統的な画材を使用して筆ペンで散らし書き作品を制作することで、現代に息づく伝統的な芸術的価値を実感させることもねらう。

第2單元では、『徒然草』の人生相談を編集する場を設定する。章段から情報を取り出して精査し、現代に関係付け、人生相談を編集するプロセスを通して、自分の考えの形成に効果的に活用させる能力と古典を生活に役立てようとする態度の育成を目指す。まず、教科書掲載以外の50章段に出合わせ、人生相談として活用するための論証材料となる章段を選ばせる。選択した章段に表れている当時の人物や状況を現代に照らし合わせながら架空の人物を想定し、虚構の文脈で相談と回答を書く言語活動を行う。そのことを通して、自分とテキストを関係付けて読む能力、活用するために古典を要約する能力、相手意識をもって書く能力の育成を目指す。

2 研究目標

古典を実社会で活用する場や編集学習のプロセスが読解力を高め、古典の有用性を実感させ、主体的に伝統的な言語文化を享受・継承する態度の育成に有効であることを明らかにする。

3 研究の実際

(1) 検証授業

① 第1単元 和歌の世界の扉を開こう！

～兼好法師家集アンソロジー作り～

帯単元で「兼好法師家集」の和歌の基礎知識を習得しながら音読させた。第2次では、個々でテーマを決め分類、比較しながら和歌を3首選び、歌の背景や心情を読み取り、画材を吟味し、和歌の配置を考え丁寧に視写している様子が伺えた。第3次では、選択理由や自分との関係付けや選んだ和歌の相互関係などアンソロジーを編む思考過程を文章化し、学習の振り返りをさせた。この学習は第2単元の編集学習への意欲喚起となった。

② 第2単元 「『徒然草』 明るい人生相談」を出版しよう！

第1次では、『徒然草』の基本知識やテキストからの情報の取り出し方、多面的な読み方を習得させるため、教科書掲載の「仁和寺にある法師」の共通学習を行った。人物像や状況を精査・解釈させ、教師見本の人生相談の構成や要素から、どのように読んでいけばいいのかを確認した。章段の人物を多面的に捉える活発な意見が出て、生徒たちは読み方の面白さを感じているようだった。

第2次では、教師作成の50章段現代語訳テキストを読み『徒然草』の概観を捉えさせた。人生相談を書くための読みの観点を提示し、人生相談として活用したい章段を選ぶ活動を通して、古典と現代社会の接点を発見させ、自分達に役立つ章段があることを実感させた。全員が3章段を選ぶことができ、「徒然草が身近になった。現代にも役に立つ古典なんてあるんだと思った。」「共感できる。」「似た体験がある。」「アドバイスしやすそう。」などの反応があり、人生相談を意識して活用するために何度も読み直したり、関連本を利用し、主体的に情報収集しようとする姿が見られた。

第3次では、思考ツール（ウェビングマッ

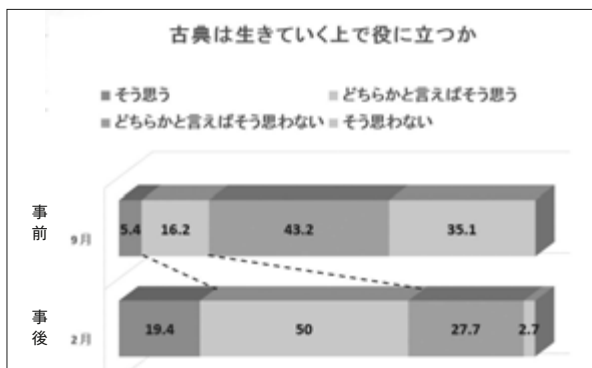
プ）で、発想を広げて個々の章段の要素を分解し可視化させ、自分や社会と関係付けて読む能力や統合する能力の育成を目指した。内容理解に役立つことを実感していた生徒も多かった。次に章段に表れている人物像や状況と似ている現代の人物や状況を想定し、虚構の文脈で相談を作らせた。読解力の育成をねらった条件（相談と回答、章段との整合性、展開の工夫、古文の引用、要約の取り方、視写）を提示し、教師見本を参考に相手意識をもたせ回答作りをさせた。書くことのできる能力差対策のため、個々の指導に重点を置き、発達障害の生徒や書くことの苦手な生徒には対話で考えを引きだしながら授業を進めた。外国籍で日本語のわからない生徒には英語版の学習材を与えた。生徒一人一人が自分の文脈に結び付け効果的な回答になるように工夫して「『徒然草』 明るい人生相談」の冊子を全員で完成させ、達成感を味わうことができ、編集のプロセスと個別の指導の有効性を実感した。

第4次では、自分達の編集した「『徒然草』 明るい人生相談」を読み、友達がどのように『徒然草』を享受したかを確認し相互評価を行った。学習の振り返りでは、「古典とは人が生きた証で自分と似た考えを見つけれられるものだと思う。」「自分を見つめ直すきっかけになった。」「どんどん書いていくうちに何回も読んだので内容が深まっていた。」「この授業をやったことで古語の意味を知り、文章を書く時どう書けばよりよくなるかを知ることができた。」「古典に対してのイメージが変わり興味がわき読書の分野が増えたので学べてよかった。」など古典を身近に感じ、古典との向き合い方に変容がみられた。また、古典を活用したことで回答に説得力が増すことを実感していた。このように、自分の考えの形成に古典を取り入れ、主体的に古典の学びに向かう態度の育成に有効であった。製本した「『徒然草』 明るい人生相談」の紹介活動で

の同学年の反応から、達成感と古典の有用感をより実感していたようだった。

(2) 検証授業の分析と考察

実社会で古典を活用する場を二つの単元で設定し、兼好の文芸家、批評家としての二つの側面から捉えたことが、読む意欲を継続させ楽しみながら学ばせることにつながることを実証された。第1単元では、和歌で表現された自然観、恋愛観、孤独感を一つ一つの言葉を吟味しながら解釈し、人生を豊かにする和歌の芸術的な価値を実感させた。また、伝統的画材や筆ペンを使い、和歌の散らし方を工夫して丁寧に視写することで、現代に息づく伝統文字文化を再認識させることができた。第2単元では、生徒たちは、人間の本質、教訓、処世術の章段を中心に自分の文脈で相談を作り、回答に古典の要約や引用が説得力を上げることに有効なことを体得し、現代とのつながりや有用感を確認できた。



古典に関する知識

古典に関する意識アンケートで「古典は、役に立つ」と回答した生徒が、事前では約22%だったが、事後では、約70%になった。また、「自己発見できる。」「もっと読みたい。」などの声が多く聞かれ、主体的に古典に取り組もうとする姿勢が伺えた。また、編集プロセスによって、読むことと書くことが往還的に行われ、思考や言語操作が促され情報を活用して読む力が高まった。

第1単元では、和歌を比較し、言葉を吟味しながら、テーマや自分との関係性で繋いで選び、アンソロジーを編んだ思考の流れ（理由）を文章から読みとることができ

た。

第2単元「『徒然草』明るい人生相談」では、生徒たちは、章段から単に情報を取り出すだけではなく、教師見本を参考にしながら、相談と回答を書く目的のために再読し、章段を精査・解釈し、現代や自分の文脈に関係付けて統合させる読み方をしていた。この結果、同一章段でも、分析したものの切り取り方で、生徒たちが『徒然草』から様々な人生相談のテーマを発見し、『徒然草』を自分事として享受したことが伺えた。

また、編集プロセスの進捗状況を把握することで、過程での読解力の評価が可能になり、個々のレベルに応じた支援ができた。個々の思いを見取りながら、カンファランスを用いることで書くことを苦手としている生徒も完成させることができ、個々の学びが成立した。従来の書くことの評価は数値化されるだけで、身に付けた言語運用の力を生徒自身が実感できないが、教師見本を参考に、目的に合わせて書き、自己評価しながら推敲する過程で、身についた能力を生徒自身が認知することが可能になった。完成させたことで、生徒達が伝統的な言語文化の担い手となったことを自覚し、達成感を味わわせることができたので、本研究は有効であった。

4 研究のまとめ（成果と課題）

(1) 成果

- ① 古典を実社会で活用させる場の設定で、主体的な学びが発動され、古典の有用性を実感させ、享受・継承する態度の育成に有効であることが明らかになった。
- ② 『徒然草』を再構築するプロセスが、古典活用のために精査・解釈する読解力の育成と個の学びの保証に有効であることが明らかになった。

(2) 課題

他の古典教材も小単元として年間カリキュラムに位置付け、実社会で活用させる視点から古典に親しむ生徒の育成を目指した学習指導の在り方を探究する。

Ⅱ 特別支援学校編Ⅱ

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた生徒の思いを生かした授業づくり

～授業の視点シートを使った音楽の授業分析を通して～

県立東金特別支援学校教諭 こんどう か な こ 近藤可奈子



1 研究主題について

学習指導要領の改訂にともない、「子供たちが『主体的・対話的で深い学び』ができてきているのかといった子供たちの変容等を踏まえて指導方法を見直し、改善していくことが必要である」と示された。本校高等部の選択音楽では、生徒が興味・関心をもって主体的に取り組めるように、生徒の意見や思いを取り入れた学習や協働的な学習ができるような授業展開を工夫することで、生徒の意欲や次への学びにつながっていくことが分かった。しかし、生徒の思いをいかに見取り、授業に生かすか、学びを深めていくための授業展開や支援の方法が課題となった。授業で何を、どのように学んでほしいのかを明確にし、生徒の思いをいかに見取り、計画、実践していくのか、どのように支援すれば、「深い学び」につなげることができるかを追究したいと考え、本主題を設定した。

2 研究目標

生徒の思いを生かした音楽の授業を通して、「主体的・対話的で深い学び」ができるような授業づくりにつながる視点を明らかにする。

3 研究の実際

(1)「主体的・対話的で深い学び」のある授業要素の検討

4月から7月の授業をもとに話し合いを行い、授業要素の検討をした。

①「授業の視点シート」を活用した授業の視点の検討

「授業の視点シート」には、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」に向けて期待する姿や学んで欲しいこと、支援の方法、生徒の様子、次への学びに向けての工夫点など、授業改善の視点を記入できるようにした。「授業の視点シート」に授業の振り返りを通して記載し、改善してきた(図1)。「授業の視点シート」の記載内容を整理することで、「主体的・対話的で深い学び」につながる授業の要素がはっきりし、生徒の思いの見取り方や教師の支援の方法の改善につなげることができた。

図1 授業の視点シート

授業の視点シート (主体的・対話的で深い学び)	記入する
「学んでほしいこと」「引き出したい姿」(目標)	記入してほしいこと・今日の授業で学んでほしいことを記入。 ・その子に合った具体的な目標を記入。
「今日の学びのポイント」	・今日の授業の中で一番学んでいたと思われる様子を記入。
「生徒の思い」	・自分の思いをどう表していたか記入。 (どう見取ったか)
「支援」	・どのタイミングでどんな言葉をかけたり、支援をしたら良かったか。その結果生徒はどんな様子だったか。を記入。
「その他」	・気が付いたことを記入。

②「学習振り返りシート」を活用した振り返りの仕方の検討

生徒が書き込む「学習振り返りシート」は、その日の目標について振り返ることができるように作成し、改善した(図2)。このシートを活用し、振り返りをするには、短時間で記入でき、記入する内容が分かりやすく、チェックをすれば良いものや簡単に感想を記入できるも図2 学習振り返りシートのが適していた。

③活動内容の精選

これまでの授業では、歌唱、器楽等の活動を一時間の中で複数行うことが多く、生

学習振り返りシート 名前

今日の目標 ひびくように、音をあわせてね。

やってみてどうだったかな？
○をつけよう！

☐音がひびいた ☐音がひびかなかった
☐音をあわせてならせた ☐音があわせてならせなかった
☐自分からできた ☐難しかった
☐楽しかった ☐つまらなかった

ほかに気づいたことはあるかな？

つぎは、なにを やってみたい？

先生から

友達から

図2 学習振り返りシート

徒を急がせてしまう場面や教師が主導してしまう場面が多く見られた。「主体的な学び」や「対話的な学び」を取り入れるには、活動内容を絞り、生徒が話し合いや振り返りシートに記入する時間の確保が必要であった(図3)。

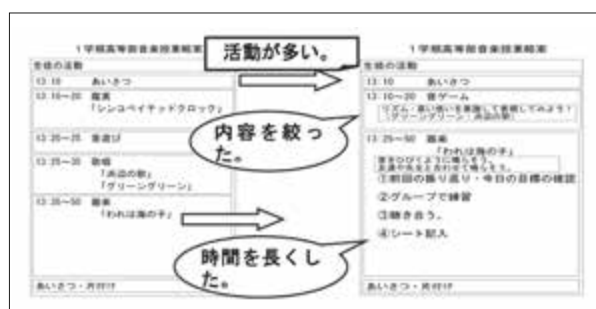


図3 授業内容の精選

④「深い学び」についての協議

4月から7月の授業を振り返り、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」とはどのような学びや生徒の姿かを話し合った。

器楽では、同じ曲を2グループで取り組み、授業の終わりにお互いに聴き合い、意見を出し合った。相手のグループが自分たちよりも速いテンポで演奏していると気が付いたAさんは、「一緒にそのテンポで演奏したい!」と気持ちを表した。速いテンポでの演奏後、「できた!」と、とても満足そうであった。自分たちの演奏方法と違う点に気付き、やってみたいという気持ちを持ち、実際に行うことで達成感を感じたのではという意見がでた。

また、自分の楽器を鳴らすタイミングがつかめずにいたBさんに、楽譜に印を付けたり合図をしたりする等の支援を行ったが、練習ごとに自信がなくなってしまった。そこで、指示を一つに絞ると、タイミングよく鳴らすことができた。このことは、「支援が多すぎた」という意見が挙げられた。このように、生徒の様子を振り返りながら教師間で話し合い、「深い学び」とは、「実感をともなう(気付く)学び」であり、「深まりにくい学び」とは、「教師の支援が多

すぎる時、本人に合っていない支援の時」という視点で方向付けることができた。「主体的・対話的で深い学び」につながる授業は、「生徒の気付き」「教師の言葉かけ(支援)のタイミング」を大切にすることではないかと考え、このことを意識して9月から授業に取り組んだ。

(2)「生徒の気付き」「教師の言葉かけ(支援)のタイミング」を意識した授業づくり

- | | |
|-------|--------------------|
| ①対象 | 特別支援学校高等部生徒 |
| ②実施期間 | 9月～11月 |
| ③実施単元 | 選択音楽「日本芸能を通じた表現活動」 |

【第1時・楽器選び】

日本芸能を鑑賞し、自分の使ってみたい楽器や獅子頭などを決めた。その中で、楽器を持つことが苦手な生徒に「手作りささら」を提示し、ひざの上で鳴らすと、口を大きく開けて楽しそうな笑顔を見せた。右手に一緒に持ってもう一度鳴らすと、同じ反応をした。教師はその表情を「気に入った」と見取り、「これでいいかな?」と言葉をかけると、再び口を開けて返事をした。教師の言葉かけのタイミングがその生徒にとって適切な間合いであり、気持ちの表現につながったと考えられる。

【第2～6時・表現を考える】

グループに分かれて、表現の仕方を考えた。初めは自分で自由に「たたく」「鳴らす」「動く」という表現をした生徒が多かった。その中で「単独でやってみた。難しかった」と「学習振り返りシート」に記入した生徒や「意欲的には鳴らしているが、この後どうしたらいいのか」という教師の意見が出た。そこで、音楽を作っている要素やリズム等を示した。Cさんは、自分で選んだ楽器をなかなか鳴らそうとしなかったが、友達がリコーダーを吹き始めると、そのリズムに合わせて発声する様子が見られた。その様子から一緒にやりたいのではと生徒の思いを見取り、教師が合いの手を入れると、さらに大きな声を出すことができた。他の事例では、楽器を通して教師が思いを

見取り、かかわることで自分から楽器を鳴らしたり、友達の音を感じて合わせようとしたりするようになってきた。そこで、表現の組み立て方を考えた。生徒は、自分のやることが分かってきたことで、自分の楽器だけではなく、友達の表現方法を一緒に考えるようになってきた。生徒が活動に取り組む前に教師が言葉かけをするのではなく、生徒の思いや意見を聞き、活動に取り組んでいる所を見てから言葉かけを行うことで、生徒が自分の役割に気が付き、自分から取り組む姿が見られるようになってきた。また、お互いが見合ったり聴き合ったりするようにしたことで、自分の視点だけではなく、見聴きしている側の視点を取り入れ、より良い表現にしようという生徒も見られてきた。さらに、地域の獅子連の方に獅子舞の演技を見せてもらうことで、生徒は、「やってみたい!」という思いを表した。

自分の役割が明確になり、教師が生徒の思いを表情や動き、「学習振り返りシート」などから見取った上でタイミングよく支援をすることで、「気付く」「考える」「振り返る」といった姿が見られた。一緒にやってみたり、いろいろな意見を聞いたりすることで、実感をとめない、「もっとやりたい」という意欲につながっていく様子が見られた。

(3)授業の振り返り

教師で授業を振り返り、次の意見が出た。

- 生徒の思いの見取り:「発言する言葉だけでなく、表情や態度、動き、目の動きから生徒の思いを見取ることができた」
- 生徒の気づきを促す支援:「生徒同士のやりとりの中で生徒が自ら気付くためには、教師の適切な言葉かけやアドバイスが必要」
- 教師の言葉かけのタイミング:「最初からの指示ではなく、考える時間をもてるように言葉かけを待ったり、生徒自身が答えを出せるように質問をしたりできるようにすることで生徒の気づきにつながるがあった」
- 深い学びにつながる支援:「自分で考える、振り返る、やろうとすることを繰り返すことで、自ら学ぼうとする姿が見られ、深い学びにつながっていく」等

4 研究のまとめ

(1)成果

「主体的・対話的で深い学び」につながる授業をつくるための視点として、下記のことが大切であると考えている。

- ①何を学んでほしいのかを明確にし、生徒の思いをどう見取るかを「授業の視点シート」を活用しながら授業を振り返り、次の授業へつなげていくこと
- ②「学習振り返りシート」を活用し、生徒が振り返り、次はどうするかを考えることができるように支援すること
- ③授業内容の精選をし、考える活動を取り入れること
- ④教師間で「主体的・対話的で深い学び」につながる授業づくりの視点を話し合い、共有していくこと

「主体的・対話的で深い学び」につながる授業づくりの視点をまとめたものが図4である。これらの授業の視点を踏まえて取り組むことで、生徒や教師の気づきがあり、お互いに学び合いながら「主体的・対話的で深い学び」につながっていくと考える。



図4「主体的・対話的で深い学び」につながる授業づくりの視点

(2)課題

この「主体的・対話的で深い学び」につながる授業を他の各教科等にも発展させていくことが課題である。その際には、生徒の思いを生かし、授業にどう取り入れていくのか、生徒の気づきを引き出せるようなやりとりとはどのようなものなのか、という視点で、教師間で振り返りながら授業をつくっていくことを大切にしたい。



本校キャラクター
ヤーマンと獅子舞